

第2節 Uターン移動者の価値志向について (川端 亮)

はじめに

この節の目的は、人々の新しい価値志向を探るということにある。そのために選択肢による質問項目と自由回答による質問項目とを検討し、自由回答法による分析の一例とした。

自由回答法を用いる利点の1つに、選択肢法が回答者の反応を選択肢という範囲内に限定し、それ以外の反応を抑制している欠点を補うことができることがあげられる。ある程度測定方法の定まっている概念の場合は、選択肢法の方がコーディングも容易であり、以前の同じ質問と比較することも可能であるので、選択肢を用いるべきであるが、測定方法の定まらないものを分析する場合は、自由回答法を用いることも有効である。

この節で中心となる意識は、脱階層志向的な意識である。社会階層論においては、階層的な地位というものが焦点となり、地位達成が問題として論じられてきた。階層的な地位は従来の研究の蓄積からかなり明確な概念であり、したがって、それを志向する意識の測り方もある程度定まっている。しかし、近年人々の階層的な地位の志向性は弱く、また、地位との関連も明確でないことが指摘されている。むしろ人々は階層的でない志向性を持っているのではないかという疑問が提起されている[1]。ところが、この脱階層的な志向性とは何かは、あまり明確ではない。この不明瞭な部分を自由回答によって探るとというのが、この節の目的である。

そのためにふさわしい対象はどのようなものであろうか。近代日本においては、上昇志向的な地位達成意欲によって、社会は流動化し、豊かな社会を実現したといえるであろう。それは、向都離村といわれるように田舎から都会へという人々の地域移動をともなった。特に1973年のオイルショックまで、すなわち高度経済成長といわれた時代までは、この傾向は顕著であった。この時代は、日本の近代化・産業化は、発達を続けた。この時代は、工業によってモノをつくることが中心の時代であり、そのモノを生産する労働力として、田舎から都市へ人々が移動せざるを得ない時代であった。人口の移動をみても1960年代は、東京圏、大阪圏、名古屋圏への人口集中が明瞭であった。

このように地位達成意欲と人々の地理的移動に関連があるとすれば、地位達成的でない新たな脱階層的な価値志向は、近代社会に特有な向都離村という人々と反対の動きのなかにより顕著に見られるのではないかと考えられる。

この都市から田舎へという移動もそれほど少ないものではない。たとえば、Uターンといわれる移動も都市から田舎への移動の一部である。Uターンほど有名でないにしてもJターンという言葉もかなり知られているであろう。このように田舎で生まれ育ち、そこから都会へでて、その後再びその田舎へ戻ったり、その途中のなじみのある土地に住み着い

たりするものと異なり、生まれ育ったときから全く田舎で暮らしたことがなく、都市の生活様式にのみ慣れ親しんでいたものが、田舎へ移り住もうとする移動がある。それが、脱都会、田舎暮らしなどという言葉で注目を集め始めた現象である。

これらの言葉は、1978年、『ウッディライフ』（山と溪谷社）が創刊されてから使われるようになったといえよう。そしてさらに多くの人に知られるようになったきっかけは、1986年、『家庭画報』（世界文化社）において始まった1つの連載であった。これは、「われら新・田舎人 - もう一つのライフスタイルを求めて - 」というタイトルで、1年間にわたり、都市から田舎へ移住した12家族を取材したものである。この連載は、大変好評で、「新・田舎人」という言葉の流布の端緒となった。翌1987年には、『田舎暮らしの本』（JICC出版局〔現・宝島社〕）が創刊される。これは、10数万部がコンスタントに売れ、注目されることとなった。

ところで、このような都市から地方への移住の特徴は、移住するその地に全然関係がないこと、移住する本人が田舎暮らしをしたくて、自発的に行くこと、移住者たちは、都会で生まれ育っていることなどである。この移住をもっともよく表す用語は、Iターンであろう。このIターンという用語は、1989年に長野県が東京・大阪・名古屋に定住促進のための就業・移動相談室の名前として造語し、その後一般に流布したものである[2]。

このような地方志向の高まりは、決して小さくなく、また、現在も続いているといえよう。新聞で特集記事が組まれることは、たびたびであり、インターネット上で、田舎暮らしの体験談を載せたり、移住を援助してくれる自治体の紹介などのホームページも見つけることができる。この節では、このIターンのような、産業化が進行する時代には注目を集めなかったような現象について、それを支える価値観を描くことによって、脱階層的な志向性を探ることを目的とする。そのためにIターン移動者が比較的多く見られる地域を対象に調査を行った。

1. 調査対象地の特徴

調査対象となった地域は、長野県諏訪郡原村である。この原村が調査対象としてふさわしい特徴は、都市部ではないのにも関わらず、移住者がみられ、人口が漸増していることである。1990年におよそ6500人の人口であった村は、1995年には、7000人を越えるようになり、村では、21世紀初頭の人口は、8000人と予測している。決して量的には多いものではないが、この人口の増加は、地方から都市へ、特に東京へという移動が全国的な現象である近代以降の日本において、きわめて珍しく、注目に値する現象であろう。

原村のもう1つの特色は、多くのペンションが集中していることである。現在でこそ清里高原など信州の他の地域でもペンション地帯として有名な地域があるが、原村のペンションヴィレッジのオープンは、日本のペンション史の中で、初期のきわめて画期的な出来事であったことは間違いない。1980年頃よりペンションの開業が進み、現在、ペンション

ヴィレッジは、第1ペンションヴィレッジと第2ペンションヴィレッジがあり、併せて80数軒のペンションが集まっている。このペンション開業者の大部分が、Iターン移住者である。また、ペンション地帯と隣接する地域で、別荘地が売り出されており、その別荘地に定住する人々も増える傾向にあり、彼らもまた大都市からの流入者である。

そしてこのIターン移住者は、地域的にかたまって居住している。村は、八ヶ岳山麓の標高850～1,250mの緩やかな傾斜地にあり、東から西へと下っていくにしたがって、未広がりに広がる扇形をしている。その東側半分がペンション地帯、別荘地帯であり、Iターン移住者が住む地域である。そして、西側半分が、農業が中心である、ネイティブが多く住む地域である。ここでは、米と共に標高1000メートル前後の高冷地での高原野菜の栽培が盛んである。このようにネイティブとストレンシャーとは、居住地域がきれいに分かれている。

2. 調査方法

調査は、Iターン移住者層に焦点を合わせている。その際、原村西側半分に住むネイティブ層と比較して、Iターン移住の特徴を明らかにしようとした。調査対象者は、原村に住む69歳以下の有権者で、系統抽出法により、サンプルを抽出し、5402人の中から、最終的に318人を対象者とした。しかし、原村の総人口に占める移住者の割合は、およそ1割であり、この数では、Iターン移住者を対象とした統計的な分析がなされるのに十分な数とはいえない。そこで、原村全体を代表するサンプルに加えて、別荘地帯やペンションヴィレッジでは、原村全体のサンプルに当たらなかった全世帯から1人をランダムに抽出し、調査対象者とした。その数は、139サンプルである。

したがって、調査対象者数は、合計457である。

調査期間は、平成9年8月29日から9月1日までの4日間であった。さらに調査地域がかなり広く、また、宿泊地と調査地点が離れていることもあって、対象者との面接に十分な時間があてられないことが予想された。そこで、調査方法においては、戸別訪問面接法だけでなく、留置法を半数用いることにした。さらに、留置法においては、回収の際、郵送によったものもある。その結果、最終的に回収されたのは、285票、回収率は、62.4%であった。

3. 職業移動

まず、職業について、見てみよう。表1は、原村全体と追加した別荘地帯やペンションヴィレッジ(原山・P地区)のサンプルの職業構成を表にまとめたものである。

原村全体の職業構成の特徴をみていくと、事務的職業、販売的職業、熟練的職業が多いことも目に付くがなによりも農林的職業の人が、17%で、日本の職業構成に比べて相対的

に多いことが特徴であり、産業の中心の1つが農業であることが明瞭に現れている。また、無職が1割弱と少ないことも特徴であるが、これも農業などの自営業が多い影響であろう。管理的職業の人はきわめて少ない。

原山・P地区の職業は、圧倒的に販売的職業が多い。これは、ペンション経営が販売的職業のカテゴリーにはいるからである。

表1 現在の職業

	原村全体	原山・P地区	合計
専門的職業	16 9.3%	11 13.8%	27 10.7%
管理的職業	2 1.2%	3 3.8%	5 2.0%
事務的職業	31 18.0%	4 5.0%	35 13.9%
販売的職業	28 16.3%	46 57.5%	74 29.4%
熟練的職業	30 17.4%	1 1.3%	31 12.3%
半熟練的職業	12 7.0%	3 3.8%	15 6.0%
非熟練的職業・ 単純労働者	6 3.5%	0 0.0%	6 2.4%
農林的職業	29 16.9%	0 0.0%	29 11.5%
無職	17 9.9%	11 13.8%	28 11.1%
学生	1 0.6%	1 1.3%	2 0.8%
合計	172	80	252

表2 移住地域の現在の職業

	男性	女性
専門的職業	14 15.2%	5 5.8%
管理的職業	4 4.3%	0 0.0%
事務的職業	2 2.2%	9 10.5%
販売的職業	52 56.5%	52 60.5%
熟練的職業	5 5.4%	0 0.0%
半熟練的職業	4 4.3%	2 2.3%
非熟練的職業・ 単純労働者	1 1.1%	2 2.3%
農林的職業	1 1.1%	1 1.2%
無職	9 9.8%	15 17.4%
合計	92	86

次に、原山・P地区への移住者に限って、転居前の職業と現在の職業を比較する。原村の中で、都市からの移住者がその構成員の大部分を占める、原山地区とペンション地区を併せて移住地域と呼び、他の原村の地域を定住地域として、比較しながら分析をしていきたい。定住地域のサンプルは、系統抽出によって選ばれたサンプルの中で、原山・P地区以外のサンプルであり、移住地域のサンプルは、原山・P地区の系統抽出分とともに全世帯調査分のサンプルも含まれている。

また、職業構成においては、男女間で大きな違いがあるため、男女をまとめたサンプルでは、その特徴が現われにくいことがある。現職では、圧倒的に販売的職業が多く、男女間の差は問題とならないが、転居前の職業においては、男女の違いがある。そこで、男女を別にして分析を行う。質問紙では、本人の職業とともに配偶者のある人にはその職業についても尋ねている。そこで、調査対象者だけでなく、配偶者も含めて、その職業構成を

みてみよう。

男性の場合、原村に転居する前の職業では（表3）専門的職業の人が、およそ3割という高い割合を占める。事務職も33%と高い割合を占め、他の職業は、すべて少なくなっている。この原村居住前の職業は、かつての職業、つまりは若かった頃の職業である。したがって、管理的職業が少ないことは、年齢的な側面から説明することができよう。つまり、Iターン移住者の以前の職業は、専門職や管理職予備軍などを多く含むホワイトカラー層だといえよう。

これらの人が原村に転入すると、先の表1でも見たとおり、多くの人が販売的職業に従事するようになる。（表2参照）。それは、原村のIターン移住者の住む地域での主要な産業の1つが観光、つまりペンション経営であるからである。したがって、職業移動という観点からみると、専門的職業、事務的職業から販売的職業への移動が多いといえる。

女性の場合も転居前の職業の特徴は、男性の場合と同様であり、専門的職業がおよそ2割、事務的職業がおよそ3割と多くなっている。そして、もっとも多いのは、無職の割合でおよそ4割である（表3参照）。現在の職業では、男性と同様ペンション経営が含まれる販売的職業が6割と多い（表2参照）。職業移動という点から言えば、男性と同じく、専門的、事務的職業から、販売的職業への移動ともに、無職から販売的職業への移動という経路を指摘することができる。

表3 移住地域の転居前の職業

	男性	女性
専門的職業	25 28.1%	15 19.2%
管理的職業	5 5.6%	0 0.0%
事務的職業	29 32.6%	21 26.9%
販売的職業	8 9.0%	9 11.5%
熟練的職業	7 7.9%	2 2.6%
半熟練的職業	6 6.7%	1 1.3%
非熟練的職業・ 単純労働者	1 1.1%	0 0.0%
農林的職業	1 1.1%	0 0.0%
無職	7 7.9%	30 38.5%
合計	89	78

4. 価値志向について

4-1 地位指向と個性指向

さて、職業の分析から、Iターン移住者は移住に伴って職業を大きく変えていることがわかった。これを社会移動の観点から考えてみよう。社会移動には、水平移動と垂直移動という2つの側面があるが、その垂直移動の側面から考えると、彼らの移動は、専門的・事務的職業から販売的職業への移動であるので、下降移動と考えることができる。近代の産業化社会において、人々は地方から都会へと移動した。そこには、田舎では得ることが難しい生計の手段を、都市では比較的簡単に得ることができるということ以上に、故郷を離れ都会にでて、成功する、すなわち上昇移動を志す価値観と無縁であったとは思われない。ここでは、職業、所得、学歴などの階層的地位を構成するものの獲得を重視したであろうが、Iターン移住者においては、移住によって、少なくとも職業においては、階層的

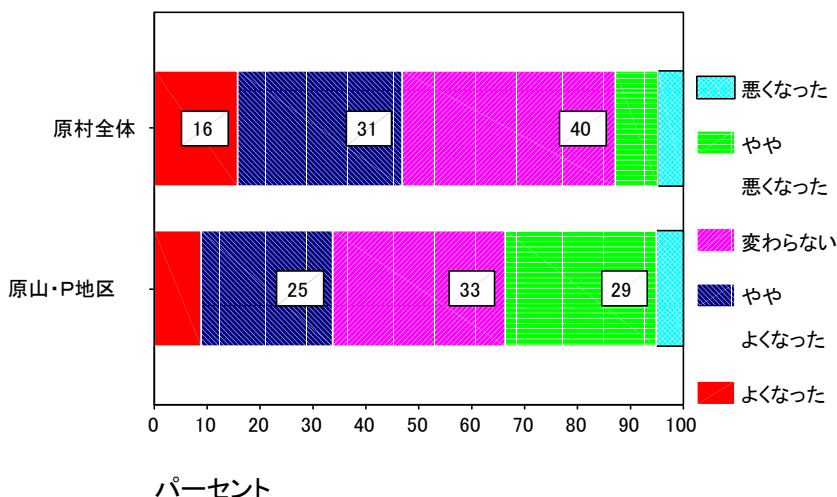
な序列を上昇することが達成されることは容易ではない。

職業カテゴリーの分析だけで、上昇移動への志向性をみることは、十分ではない。経済的な地位も調べれば、よりはっきりとするであろうが、以前の所得を調べることは、困難と思われる。そこで、生活の変化についての意識をグラフ1で、みてみよう。これは、この10年間の生活水準の変化について尋ねたものである。原村全体では、「変わらない」という人が、40%を占めるのに対し、原山・P地区では、33%にとどまり、「やや悪くなった」という人が29%を占める。原山・P地区では、「よくなった」、「ややよくなった」という人も原村全体と比べると少なく、全体の傾向として、原山・P地区の人々にとって、生活はよくない方向へ変化したことが読みとれる。これは、ペンション経営者の多くにとっては、一時期のペンションブームの頃よりは、経営が難しくなりつつあることの現れであろうし、近年の別荘地帯への都会からの移住者にとっては、都会での生活と原村での生活の経済的、地味的な変化の側面を表していると考えることができよう。

しかしながら、生活全般にわたる満足度を調べてみると、原山・P地区の人は、33%の人が、満足と答え、原村全体の27%よりもむしろ多い。「不満である」と「やや不満である」も原山・P地区では、若干多いが、全体的な傾向としては、原村全体と原山・P地区では差がないことがわかる。したがって、生活の変化でみられた生活が苦しくなったという傾向と生活への満足は、直接結びつかない。おそらくは、生活の変化とは異なる環境的な要因や主観的な満足が、原山・P地区の人々にはあるのであろう。

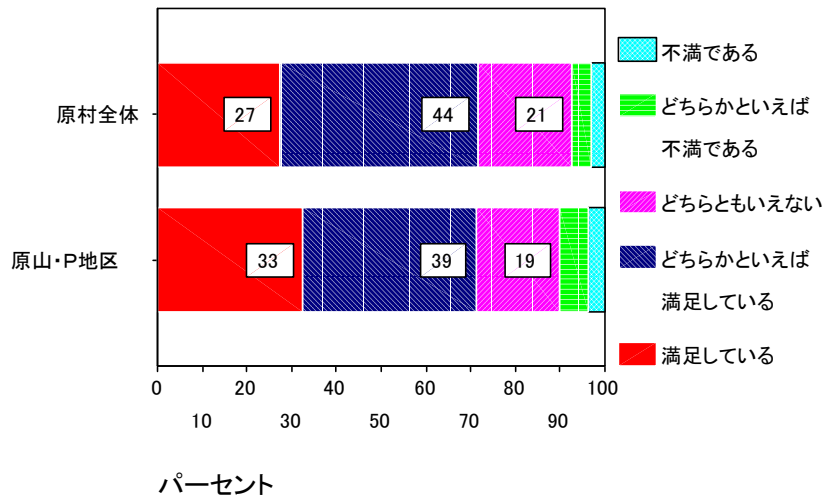
グラフ1

生活水準の変化



グラフ2

生活全般に対する満足度



今田高俊（1998）は、職業、所得、学歴などのいわゆる階層的地位を重視する指向性をポスト物質社会に対する近代の産業化社会に特徴的な達成的地位指向と呼んでいる。これを用いてその指向性を調べてみる。

この調査での質問文は、今田高俊が用いた1995年SSM調査と少し異なるが、表4の上から4項目である。

選択肢は示したように「重要である」、「やや重要である」、「あまり重要ではない」、「重要ではない」の4つである。

この地位指向に対して、今田は、ポスト物質社会において見いだされるべきものとして関係的地位指向というものを抽出している。それは、「家族から信頼と尊敬を得ること」、「ボランティア活動、町内会活動など、社会活動で力を発揮すること」、「趣味やレジャーなどのサークルで中心的な役割を担うこと」からなるものである。これらによって人間関係での評価を重視するものとしている。今回の調査では、地位指向とは異なる新しい指向性を抽出するということを目的に、いくつかの質問文を加え、主成分分析で検討を加えた結果、表4のeからhまでの4つの質問文を加え、分析した。

これらの8項目で、尺度を作るために主成分分析をした。固有値1以上の因子は、3因子抽出され、この3因子で、全分散のおよそ57%が説明された。これをバリマックス回転した結果が、表5である。

因子1は、今田のいう達成的地位指向に当たるもので、「高い地位につくこと」、「高い収入を得ること」、「子供に学歴を身につけさせること」、「財産を残すこと」の4つの質問項

目に因子負荷量が高い。これを簡略に「地位指向」と名付けておく。因子2は、「家族との会話」、「地域や町内会での社会活動」の2つの質問項目に因子負荷量が高く、関係的地位指向の一部をなすもので、「家族と地域での関係指向」と名付ける。因子3は、「趣味やレジャーに費やす時間」と「他の人とは異なった生き方をすること」の2つの質問項目に因子負荷量が高い。これを「趣味指向」と名付ける。

これらの指向性を分析するために、調査票とは逆に選択肢の「重要である」に4点、「やや重要である」に3点、「あまり重要ではない」に2点、「重要ではない」に1点を与え、地位指向を構成する4つの質問文の得点を合計する。同じようにして、家族・地域での関係指向、趣味指向を構成するそれぞれ2つの質問文の得点も足し合わせる。そして、移住地域と定住地域ごとにその平均値の差をt検定した結果が、表6である

地位指向では、移住地域の平均得点が8.07に対して、定住地域の平均得点は、10.03と移住地域の得点が低い。移住地域に住むIターン移住者たちが、達成的階層的な地位を重視する傾向は、より弱いと言える。これが職業における階層的な地位の高さを捨てて、Iターン移住することと関連があるであろう。この地位指向の低さは、Iターン移住の原因となっているかもしれないが、もしかすると、Iターン移住する事によって、職業的な地位の下降を納得するために価値観が変わるという可能性も否定はできない。

表4 地位指向と関係指向などの質問文

次にあげることがらは、あなたにとってどのくらい重要ですか。もっともよくあてはまるもの1つにをつけてください。

	重 要 で あ る	重 や 要 や で あ る	あ ま り 重 要	重 要 な い
a 高い地位につくこと	1	2	3	4
b 高い収入を得ること	1	2	3	4
c 財産を残すこと	1	2	3	4
d 子供に学歴を身につけさせること	1	2	3	4
e 家族との会話	1	2	3	4
f 地域や町内会での社会活動	1	2	3	4
g 趣味やレジャーなどに費やす時間	1	2	3	4
h 他の人とは異なった生き方をすること	1	2	3	4

表5 主成分分析の結果（ヴァリマックス回転後の因子負荷量）

	家族と地域での			
	地位指向	関係指向	趣味指向	共通性
a 高い地位	.738	-.120	.129	.575
b 高い収入	.702	-.004	.001	.495
c 財産を残す	.758	.129	.006	.595
d 子供に学歴	.677	.267	-.103	.540
e 家族との会話	-.002	.763	-.001	.583
f 地域や町内会	.123	.704	.005	.514
g 趣味やレジャー	-.007	.205	.766	.633
h 異なった生き方	.145	-.148	.748	.603
固有値	2.111	1.246	1.181	累積寄与率
寄与率	26.386	15.571	14.761	56.719

表6 地位指向と2つの関係指向

		ケース数	平均値	標準偏差
地位指向	移住地域	95	8.07	2.48
	定住地域	172	10.03	2.29
	t = -6.50	d. f. = 265	p < .01	
家族と地域での 関係指向	移住地域	96	6.55	.92
	定住地域	176	6.90	.91
	t = -3.03	d. f. = 270	p < .01	
趣味指向	移住地域	94	5.61	1.20
	定住地域	175	5.25	1.13
	t = 2.39	d. f. = 267	p < .05	

同じく、家族と地域での関係指向も移住地域の人の方が得点が低いので、それらの関係

を重視する傾向は、移住地域の方が弱い。また、趣味などの世界への指向性の平均得点を移住地域と定住地域で比べてみると、移住地域では、5.61、定住地域では、5.25 と移住地域の方が高い。その差はあまり大きくはないが、これもIターン移住者の特徴と考えることができよう。他の人と同じようにはなく、趣味やレジャーを中心の生活を志向するという生き方は、原村のIターン移住者の特徴といえる。

このように趣味などの世界を重視することが、Iターン移住につながるとしても、定住者と移住者の平均値の差は小さすぎるように思われる。つまり、この質問文、尺度ではその違いが、十分にとらえられているとは考えられない。特に、「他の人とは異なった生き方」とは何か非常に曖昧な質問で、何を意味しているか十分にわからない。

5 他の人と異なった生き方を探る

一体、Iターン移住者の特徴とは何であろうか。彼らはその生活において、何を重視しているのだろうか。それを測る適切な質問文は従来の研究の中では見あたらなかったし、適切なものを考えることもできなかった。そこで、自由回答を使って、それを探ることを試みた。用いた質問文は(問187)

「あなたにとって、豊かな生活とはどのような生活ですか。自由にお書きください。」

というものである。これに対する自由回答をすべてテキストデータとしてパソコンに入力し、AUTOCODE プログラムを使って、そこにでてくる語を検索し、度数を数えた[3]。用いたコーディングルールファイルは、付表1に示した。抽出した文字列は、29であり、その中で、主要なものについて、定住地域と移住地域に分けて集計し、その結果を表7に示した。

地位指向的な「仕事」(仕事、働く、農業など)「お金」(お金、経済的、収入など)あるいはそれに近い意味の言葉は、出現度数は多い。しかし、定住者と移住者の間で、出現率に差がない。

定住地域に住む者によりよくでてくる言葉は、「健康」(健康、元気など)「家族」(家族、家庭、子供、妻など)「現在の生活」(現在の生活、現在の状態、今のこのままなど)「みんな仲良く」(みんな仲良く、円満な、争いごとなくななど)などである。

移住地域に住む者の方によりよくでてくる言葉は、「趣味やレジャー」(趣味、コンサート、温泉、つり、美術鑑賞など)「自然」(自然、環境、季節、四季など)「心の豊かさ」(心が豊か、精神的に豊、心が満ち足りるなど)「時間」(時間、のんびり、暇、休みなど)「束縛のない」(束縛、拘束、縛られないなど)「自由」「人付き合い」(いろいろな人、交友が多い、人間関係、友達など)などである。

これらから、趣味やレジャーだけでなく、自然、心の豊かさ、自由時間、人付き合いなどを含んだ指向を移住者の特徴と考えることができるであろう。

これらの文字列を1つ答えた人と1点、2つ答えた人は、2点というように得点を与え、地域移動の形態を原村で生まれ育った人を移動なしとし、Uターン、Iターン、それ以外の流入者にとわけて、グラフに表したものが、グラフ3の「豊かな生活」とはである。

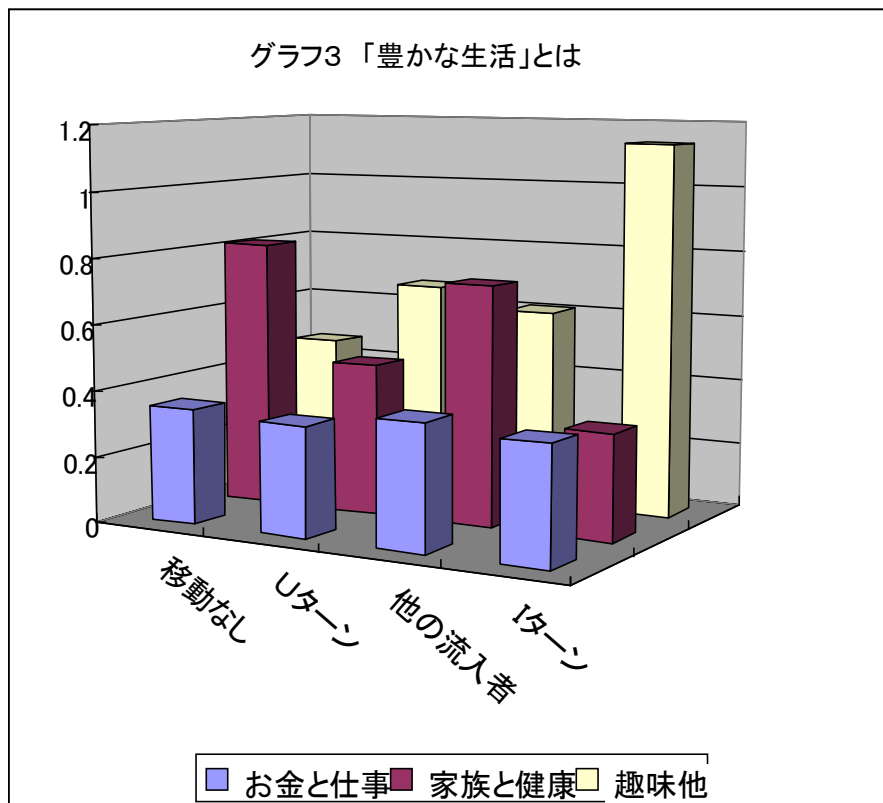
「お金」と「仕事」は、移住形態で差がない。Iターン移住者も意外とお金と仕事を答える人が多い。選択肢を用いた達成的な地位指向の分析では、もっとも差があった部分が、自由回答の分析では、差が見られなくなっている。

「家族」、「健康」、「現在の生活」、「みんな仲良く」を「家族と健康」としたが、これらは、原村生まれで原村育ちの移動なしとその他の流入者に多く、Uターン、Iターンに少ない。

Iターン移住者に特徴的なのは、趣味その他であり、これは選択肢を用いた指向性の分析と同じ結果であるが、選択肢を用いた場合よりもより明瞭な差が見られた。趣味やレジャー、自由な時間やゆとりを含み、人付き合いの多い生き方を選択肢として質問文化し、今田のいう生活様式としての関係指向の一部として、構成することができるかどうか、今後の課題である。

表7 語の出現の特徴

	定住地域	移住地域
仕事	7.6%	7.9%
お金	21.2	24.8
健康	19.6	9.9
家族	20.1	11.9
現在の生活	8.2	4.0
みんな仲良く	9.2	2.0
趣味やレジャー	7.6	12.9
自然	7.6	24.8
心の豊かさ	6.5	11.9
時間	13.0	20.8
自由	3.8	12.9
人付き合い	6.5	13.9



文献

今田高俊、1998、「社会階層の新次元 - ポスト物質社会における地位変数 - 」、『社会学評論』48(4)、419-437。

片瀬一男・友枝敏雄、1990、「価値意識 - 社会階層をめぐる価値志向の現在 - 」、原純輔編『現代日本の階層構造 - 階層意識の動態』東京大学出版会、125-147。

川端亮、1998、「階層意識に関わる変数の探索 - 地位的変数と関係的変数を中心に - 」、尾嶋史章編『ジェンダーと階層意識』(1995年SSM調査シリーズ14)、81-92。

菅康弘、1995、「都市社会化とルーラリズム」、坂田義教・栗岡幹英編『現代日本社会の変貌 - 国際化社会の内と外 - 』慶応通信、97-120。

注

[1] 片瀬・友枝(1990)、今田(1998)、川端(1998)を参照。

[2] 田舎暮らし、Iターン移動については、菅(1995)に依拠している。

[3] AUTOCODEプログラムについては、第1部第1章を参照。なお、この自由回答全文は、附属のCDに収録されている(Q18ア.dat)。

付表1 コーディングルールファイル

仕事	*	今が豊か
仕事	人並み	今が豊かである
>に対する疲労	ふつうの生活	今のこのまま
>や金銭的に束縛を受けず	まあまあの生活	今のまま
術的研究	人並み	今の生活
職業	中であること	*
創作活動	程々に	自然
働いて	平凡	環境
働き	*	季節
>たくない	将来の生活	魚取り
働けて	将来の安定	空気
働ける	老後の安定	山菜
農業	老後の生活	四季
野菜等が良くできれば	老人になったとき	自然
*	*	野草
お金	健康	緑
お金	健康	*
>では買えない	元気	空間
金があつて	元気に	空間
金がある	*	*
>とかいうより	趣味やレジャー	心の豊かさ
金銭	コンサート	メンタルな部分で有意義に
金銭的	スポーツ	気持ちの上で豊か
経済的	温泉	思いやるゆとり、豊かさがあれば
経済的裏付け	音楽会	心が豊か
経済面	趣味	心が満たされる
経済力	釣り	心が満ち足りる
収入	展覧会	心の豊か
生活費に困らず	美術鑑賞	心の豊かさ
年金	文化活動	心豊か
*	本を読んだり	精神的
貯蓄	旅行	精神的に豊か
貯蓄	*	*
*	他人に貢献する	ゆとり
衣食住に困らない	ボランティア	ゆとり
衣食住	ユネスコの寄付	心に余裕
自給	社会に貢献	悠々自適
自給自足	人のために貢献	余裕
食べるのに困らない	*	*
食べるもの	家族	時間
*	2世帯	のんびり
便利な施設	お嫁さん	暇
お店がほしい	家族	休み
スーパー	家庭	時間
デイサービス	妻	自分の時計で生きていける
デパート	子供	*
下水道工事	孫	ストレスがない
交通	肉親	ストレス
公共施設	夫婦	*
行政サービス	連れ合い	好きなことをやる
施設	*	したいこと
商店街	現在の生活	やりたいこと
診療所	現在が豊か	やりたいと思ったことがあったらすぐ出来て
道路整備	現在の状態	やりたい事
買い物	現在の生活	マイペース
物が買える	現状維持	希望通り

気持ちのまま
好きなこと
好きなことができる
好きなことをやる
好きな様に
自然体で
自分の思うとおり

*
束縛のない
拘束されず
束縛
束縛のない
縛られない

*
自由
自由
＜不
自由な
自由に
＜不

*
みんな仲良く
みんなが笑顔で楽しく
みんな仲良く
円満な
気を合わせて
全村民
争いごとなく
仲良く

*
人付き合い
いろいろな人
まわりの人たち
交遊が多い
好きな人
人との付き合い
人と親しみ
人間関係
人的
世間と和やかで
地域と交流
付き合い
優しい人間
友人
友達
良い人々
良き友人

*
幸せ
幸せ
*
安心
安心
心配事のない生活
*
楽しく
楽しく

*
充実
充実
満足
*
自分の価値観
自らの価値観
*
安定
安定
*
*